

- 10) Setoguchi, T., Takai, M., Villarroel, C., Shigehara, N. and Rosenberger, A.L.
(1988): New Specimen of *Cebupithecia* from La Venta, Miocene of Colombia. South America. Kyoto Univ. Overseas Res. Rep. New World Monkeys 6:7-9.
- 11) Takai, M., Setoguchi, T., Villarroel, C., Shigehara, N. and Rosenberger, A.L.
(1988): Preliminary report of small mammal fossils from the La Venta fauna, South America. Kyoto Univ. Overseas Res. Rep. New World Monkeys 6:11-14.

学会発表

- 1) 相見 満 (1987): コノハザルの学名の確立を目指す。第3回日本霊長類学会大会。
- 2) 瀬戸口烈司 (1987): 中新世中期のヨザルの化石。第3回日本霊長類学会大会。
- 3) 瀬戸口烈司 (1987): 南米コロンビアの中新世ラ・ベンタ哺乳類動物群について。日本古生物学会第186回例会。
- 4) 瀬戸口烈司・茂原信生 (1987): ヒト以外の動物に見られるディスクレパンシー(歯と顎の不調和)。第29回歯科基礎医学会総会。
- 5) 瀬戸口烈司 (1987): ヨザルがはらむ霊長類社会進化論への問題点。第41回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 6) 瀬戸口烈司・小沢智生・川合康司 (1988): 岐阜県可児町中村層産出の中新世ヤマアラシについて。日本古生物学会1988年年会総会。

ニホンザル野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫・足沢貞成¹⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、和田一雄・鈴木 晃によって進められた。昭和62年度の各ステーション関係の状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以来の蓄積された資料を

もとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度は室山によるグルーミング関係の研究、宮藤による群れの総合度の研究(いずれも霊長研大学院生)などが行われたほか、渡辺邦夫・森 明雄(生活史)・河合雅雄(日本モンキーセンター)などの手で、これまでの30数年間に及ぶ長期観察データのまとめが精力的に行われた。内容はポピュレーション、順位、文化行動など多岐にわたり、いずれまとめとして出版される予定である。今年も春先から夏にかけて、砂が島との間に堆積し、地続きになる状態が現出した。夏の台風によってその状態は解消されたが、観光客が島へ歩いて渡れるため、サル番を出す日がやはり多かった。一方では、対岸に石波の船だまりをつくる工事が行われ、これまであった防波堤のかさ上げや陸地側への延長があった。折りからのリゾートブームなど観光客の増加も考えられ、注意深く見守っていく必要がある。63年8月の時点での島内の個体数はマキグループ10頭を含め99頭であり、この10年間ほとんど変動していない。マキグループでは昨年ノスリにとってかわったゲバがボスとして安定し、その他主群、マキグループとも主だったオトナオスの出入が頻繁にくり返され、それぞれの顔ぶれが大きく変わった。今年度の出産は14頭であり、うち4頭が死亡した。

2. 下北研究林

岡野美佐夫・東 英生(野生生物保護管理事務所:共同利用研究員)によってM群について非積雪期の遊動の調査をオトナメス2頭に50MHz帯のテレメーター送信器を装着して行った。森 治・和田 久らによって、リタートラップによる落枝、落葉、落果量の測定が行われた。冬期の調査は12月~1月足沢・岡野・中山裕理(北大農)・東らによってM、I、Z群を対象に、2月~8月に足沢・東らによってZ群を対象に行った。Z群については分裂または、84年厳冬による大巾な個体数減が、I群については分裂とかなりの死亡が確実である。8月は脇野沢諸群の調査に足沢が参加した。

3. 上信越研究林

横湯川流域の植生とSeed trap法による果実生産量の継続調査の続行(小見山章・岐大、陸 斉ら・東京農工大)、志賀A群・C群等のニホンザルの行動・生態・社会学的研究が行われた(陸 斉ら、長谷川寿一ら・東大、鈴木 晃)。山本教

1) 教務補佐員

雄(志賀高原野外博物館), 和田一雄, 鈴木 晃, 陸 斉, 常田英士(地獄谷野猿公苑)らは, 猿害問題に関して検討し合い野猿の餌づけによるニホンザルの管理の問題について話し合った。この年からかってニホンザルの生息地の一部でもあった焼額山がスキー場として大規模な開発を受けたことも記録にとどめておきたい。

4. 木曽研究林

1987年4月から上松町倉本の山間の耕地(M群の領域)で有害鳥獣駆除として捕獲が行われた。捕獲されたのはM群の一部で6月までの間に推定約20頭程度と思われるが詳細は全く不明である。M群の主要部には耕地回避学習はなお保持されており, 耕地および人家を避けて遊動している。

5. 屋久島研究林

鈴木 滋(京大理)とDavid Hill(京大理研修員)がHappa, Ark, 半山M群で主としてオスの社会関係についての研究をすすめた。夏及び秋に増井(竜谷大)と東他で研究林域のセンサスを行った。国割岳西斜面の国立公園第1種特別地域を貫通する西部林道(県道, 栗生-永田線)の18kmのうち瀬切川から3kmの区間の拡巾改修計画が環境庁自然環境審議会にかゝり, 必要な検討をへてという付帯条件つきで“許可”された。検討会が2年5回にわたって開かれ, 工法・設計の上でのいくつかの修正がなされ, 工事影響のモニタリングが提案された。後者は1988年1月から向う6年間の予定で鹿児島県自然愛護協会が委託を受けてスタートすることになった(植生, シカ, サルをキーグループとする)。資料委員会と協力して, 猿害のため有害鳥獣駆除で捕獲され死亡したヤクザルの骨格の発掘(34体)と冷凍標本(約20体)を収集した。収集された標本は資料委員会に移管される。

研究概要

1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・山口直嗣・冠地富士男

従来からの継続として, ポピュレーション動態に関する諸資料を収集し, 定期的にはほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルなできごとや, 通年の変化について分析をすすめている。

2) ニホンザルの社会生態学, とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で, 遊動する群れが示す生活と社会現象をとらえ, survival conditionsを明らかにするために, 屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

3) 下北西北域の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM, I, Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。なぜそうなのか, また, 内部の構造はどうなっているのか, の二点に焦点を当てて資料を集めつつある。

4) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係, 個体群構造, 資源利用などに関して比較社会生態学研究を行いcommunity構造のなりたちを考える。

論 文

- 1) Azuma, S.: Distribution and abundance of Primates after the forest fire in the lowland forest of East Kalimantan, 1983-1986 in Tagawa, H. and N. Wirawan (ed): A study on the Recovery process of a burnt tropical rain forest in kutai nature reserve, Kalimantan Timur, Indonesia. South Seas Research Center, Kagosima University.

総説・報告

- 1) 渡辺邦夫(1987): 幸島で餌付けを考える。モンキー 213・214:4-5.
- 2) 東 滋(1987): 日本の野生動物-その現状と保護(1) 下北半島のニホンザル 145-146. 日本の動物(分担執筆)旺文社.
- 3) 東 滋(1987): 北限のサル。動物大百科, 日本の野生動物, 20:40-43. 平凡社.
- 4) 東 滋(1987): 照葉樹林とサル。生命の島7号:75-79.
- 5) Watanabe, K. and Brotoisworo, E.(1985): Field survey of Sulawesi macaques. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-Hu-

学会発表

- 1) 東 滋：アカキツネザルの個体群動態，第24回日本アフリカ学会学術大会。
- 2) 東 滋，足沢貞成，綿貫 豊，中山裕理，岡野美佐夫，増井憲一，森 治，和田 久：下北半島西北域のニホンザル個体群の変動と生息環境の変化，第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3(2):175。

サル類保健飼育管理施設

松林清明(施設長・兼)・後藤俊二・鈴木樹理
松林伸子¹⁾

61年度にスタートした「サル類の飼育管理および使用に関する指針」は，実施2年目を迎え，特殊実験の申請など各手続きもスムーズに行われるようになり，順調に定着に向かっていっているといえよう。定期巡回点検などサル委員会・サル施設の負担は大きい，研究の灯を守るために自律努力を続けなければならない。他大学の医学部等でも動物実験の倫理をめぐる論議が盛んになってきているが，早い時期にガイドラインを策定した霊長研の実施経過は注目されている。今後も襟を正して遵守していく必要がある。

施設を中心とした研究所のサルの年度末保有総頭数が800頭を越えた。この理由は出産数の増加と，実験殺以外の死亡数の減少である(動態表参照)。共に好ましい現象なのではあるが，予算据え置きのままに飼育頭数だけが增加するのは，運営上大きな困難を招き，決して楽観できる問題ではない。供給頭数を増やすことが当然考えられるが，研究者側の処理能力の限度もあり，供給頭数だけで調整することがどこまで可能か見極めは難しい。加えてガイドラインの規定によるケージ更新で個室ケージサイズが大きくなったため，室内収容能力が十数パーセント落ちた。つまり所内のサルの流れに滞りが生じているということである。

1) 教務職員

自家繁殖態勢の整備は長い間の努力が漸く実を結ぼうとしているもので，多様な研究需要に対応し，また野生サルを保護するためにも守っていかなければならないシステムである。これと健全な施設運営を両立させるにはどのような方策を採用すべきか，発想の大胆な転換が必要な時期にさしかかっているのかも知れない。

人事面では，調理室を担当してきた小形敬太郎が退職し，高橋末年技官が調理担当に回った。代わりに飼育補助を行う技能補佐員逸見幸子が採用された。また任期満了に伴う施設長選挙が行われ，松林清明助教授が再選された。65年3月までの任期となる。

研究概要

1) サル類の繁殖に関する研究

松林清明

チンパンジー精液の凍結保存法の検討とこれによる広域人工授精システムの開発を行っている。

2) 実験動物としてのサルの開発の研究

松林清明

前年度に実施したアンガウル島調査の継続として，同島のカニクイザル8頭を導入し，飼育法・繁殖法の検討を行っている。

3) サル類の寄生虫に関する研究

後藤俊二

野外生活のニホンザルを対象に，消化管内寄生虫相の地域差等について調べている。また，飼育下における寄生虫症の臨床病理学的研究を進めている。

4) サル類の成長の生理学的および形態学的研究

鈴木樹理

各種サル類の成長を，血中各種ホルモン・酵素などの定量並びに生体計測によって解析した。また血中各種ホルモン・酵素の日内変動を明らかにするために，ベスト着用カニューレーション法による連続採血手技の検討を行い，ほぼこの手段を確立した。

5) サル類疾病の病理学的研究

鈴木樹理

本研究所および野外で死亡したサル類について主に，死亡率の高いと思われる出生直後から幼若齢までの死亡例を中心に，病理学的検索を行い，そのおもな原因および年齢による疾病傾向および